

Techno Online

今から約1年前、東日本大震災で被災した仙台で不便な生活を過ごした。人々が略奪もせず、少ない物資に辛抱強く並んでいる情景が世界で絶賛された。日本人は列を乱して途中で割り込むことはほとんどない。

筆者の住んでいる仙台市郊外では、バス停に列ができないことがある。しかし、みんなチェックして、先に来た人が乗るまで待っている。日本人はルールを守るだけでなく、その場の空気を読んで秩序を守る民族のようだ。これは、無人野菜販売所や「棒杭(ぼうくい)にも嘘をつかない」といわれた上杉鷹山の米沢藩にも通じているのかもしれない。

日本人は会議中でも空気を読んで、会議の雰囲気を読んで、議事の流れに逆らった意見を言いくい状況がある。主催者が用意したシナリオと根本的に異なる意見は嫌われる。特に、国や自治体、大企業が関係する委員会や会議でこの風潮が強いと考えるのは筆者だけだろうか。

以前、宇宙関連の技術委員会が装置の根本的な欠陥を指摘したら、二度とその委員会出席の依頼は来なくなった。

空気を読む日本人 原発の本質的議論妨げる

若者でなくてもKY(空気が読めない)は嫌われるのだ。しかし、審議や審査をする場合、対象とするものが安全に使えなかったり、本質的な機能を果たせなかったりする場合は、会議主催者が想定する議事進行を変えても議論すべきだろうか。だが残念ながら、多くの出席者はシナリオに沿った補足的な意見は言っても、本質となる問題は指摘しにくいようだ。

このような空気を読む日本人の会議が、原子力発電所の安全性の本質的欠陥を見逃す温床となっている可能性はないだろうか。委員会や制度を整備しても、我々の「空気を読む」姿勢が国の重大決定や安全審査において本質的な議論を妨げることを危惧する。

ある学会の委員会の打ち上げで、筆者は1人に1個割り当てられた小籠包(しょうろばんぼう)を2個食べてしまい、最後の方が食べられなかった。この空気を読まない行動が同僚の先生方に揶揄(やゆ)され、いまだに会合の場を盛り上げていく。空気を読まない者が指摘する資格はないかもしれない。

(東北大学流体科学研究所
教授 円山重直)